



アムステルダム公演(3月2日、コンセルトヘボウ) | ©Eduardus Lee



パリ公演(2月25日、フィルハーモニー・ド・パリ) | ©Matthieu Gauchet



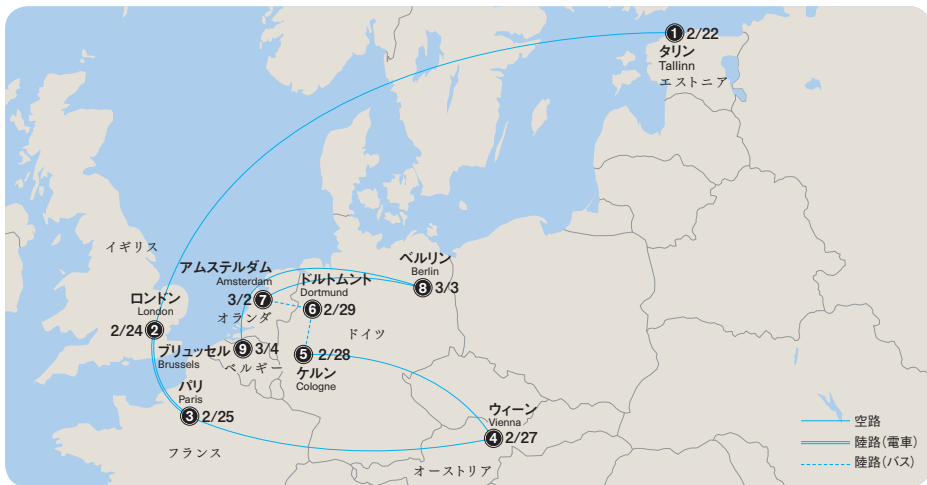
ウィーン公演(2月27日、ウィーン・コンツェルトハウス) | ©Lukas Beck

NHK交響楽団 — ヨーロッパ公演2020 — 2020年2月～3月 NHKSO EUROPE TOUR

2017年以來3年ぶりとなる、NHKと首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィによる2回目のヨーロッパ公演が行われました。ロンドン、パリ、ウィーン、ベルリンなどヨーロッパのクラシック音楽の中心を担う7か国9都市を巡って行われた公演の様子をお伝えします。

聴衆を魅了した、パーヴォ & N響ならではの本格派プログラム

首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィの指揮で、ヨーロッパの主要ホールを巡った今回のツアーでは、メインのプログラムにブルックナー《交響曲第7番》、ラフマニノフ《交響曲第2番》をとり上げました。一方実力と人気を兼ね備えた2人のソリストもこのツアーに参加。アルゼンチン出身のチェリスト、ソル・ガベッタはシューマン《チェロ協奏曲》、ジョージア出身のピアニスト、カティア・ブニアティシヴィリはベートーヴェン《ピアノ協奏曲第3番》を披露。さらに日本人作曲家の作品からは武満徹《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》を演奏し、聴きごたえのあるプログラムで本場の聴衆たちを魅了しました。



指揮：パーヴォ・ヤルヴィ (NHK交響楽団 首席指揮者)

チェロ：ソル・ガベッタ*

ピアノ：カティア・ブニアティシヴィリ**

Aプログラム

武満徹／ハウ・スロー・ザ・ウィンド

シューマン／チェロ協奏曲 短調 作品129*

ブルックナー／交響曲 第7番 ホ長調

Bプログラム

武満徹／ハウ・スロー・ザ・ウィンド

シューマン／チェロ協奏曲 短調 作品129*

ラフマニノフ／交響曲 第2番 短調 作品27

Cプログラム

武満徹／ハウ・スロー・ザ・ウィンド

ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第3番 短調 作品37**

ブルックナー／交響曲 第7番 ホ長調

Dプログラム

武満徹／ハウ・スロー・ザ・ウィンド

ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第3番 短調 作品37**

ラフマニノフ／交響曲 第2番 短調 作品27

[助成]

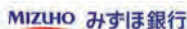


文化庁文化芸術振興費補助金(国際芸術交流支援事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

[特別協賛]



[協賛]



Tallinn

タリン(エストニア)

2/22(日) 7:00pm

エストニア・コンサート・ホール[Aプロ]

今回のヨーロッパ公演は、パーヴォの母国エストニアの首都、タリンでスタートしました。「N響とこの地で公演を行うことは、私の願いでもあった」と語るパーヴォは気合十分。ソリストにはソル・ガベッタ(チェロ)を迎え、N響もその思いに応えます。エストニア・コンサート・ホールは、満員の聴衆であふれ、1曲演奏が終わるたびに熱気が増し、ブルックナー《交響曲第7番》では、スタンディングオベーションを受けました。



左上：パーヴォの生地、タリンの美しい街並み

右上：武満徹、ブルックナーの演奏では、篠崎史紀がコンサートマスターを務めた | ©Gunnar Laak

右下：力強く情熱的な演奏で人気を博するアルゼンチン出身のソル・ガベッタがN響と初共演。表現力豊かなシューマン《チェロ協奏曲》の独奏で大きな喝采を浴びた | ©Gunnar Laak



ブルックナー《交響曲第7番》 | ©Gunnar Laak

London

ロンドン(イギリス)

2/24(日)7:30pm

ロイヤル・フェスティヴァル・ホール[Bプロ]

ロンドン公演当日の2月24日は、パーヴォの母国エストニアの独立記念日。終演後の鳴りやまない拍手にこたえてエストニアの作曲家エッレルの《故郷のメロディ》がアンコール演奏され、多彩なハーモニーが共鳴する特別な一夜となりました。



上: ラフマニノフ《交響曲第2番》 | ©Belinda Lawley

中: 公演後のパーヴォとガベッタ。日本、イギリス、エストニア、ガベッタの母国アルゼンチン、そして演奏曲が生まれたドイツ、ロシアと、「音楽は国境を越える」を感じさせる公演となった

下: ロンドン公演の舞台、ロイヤル・フェスティヴァル・ホール

Paris

パリ(フランス)

2/25(火)8:30pm

フィルハーモニー・ド・パリ[Cプロ]

パリ公演ではカティア・ブニアティシヴィリ(ピアノ)をソリストに迎えました。コントラストに富んだプログラムに客席は熱狂し、大歓声とスタンディングオベーション、拍手が寄せられました。パリ管弦楽団の音楽監督を務めたパーヴォの、フランスでの人気の高さを実感する公演となりました。



上: ベートーヴェン《ピアノ協奏曲第3番》のソリストを務めたカティア・ブニアティシヴィリ。ヨーロッパでも人気絶大で、その情熱的な演奏には、大歓声が沸き起こった | ©Matthieu Gauchet

中・下: フィルハーモニー・ド・パリの外観と客席。鳥をモチーフにしたデザインはフランスの建築家ジャン・ヌーヴェルの設計によるもの

Vienna

ウィーン(オーストリア)

2/27(日) 7:30pm

ウィーン・コンツェルトハウス [Cプロ]

ウィーン公演の舞台は、ウィーン・コンツェルトハウス。N響の育ての親ともいえるサヴァリッシュや、最近東京での定期公演を指揮したエッシェンバッハ、ルイーダが首席指揮者を務めたウィーン交響楽団の本拠地です。この伝統あるホールでN響の魅力をたっぷりと届けました。



上:ブルックナー《交響曲第7番》| ©Lukas Beck

中:伝統あるコンツェルトハウスも、満場の聴衆で埋め尽くされた

下:ゲスト・コンサートマスターのライナー・キュッヒルも来場し、篠崎史紀、伊藤亮太郎と3人のN響コンサートマスターが顔を合わせた

Cologne

ケルン(ドイツ)

2/28(金) 8:00pm

ケルン・フィルハーモニー [Aプロ]

ツアー5つ目の都市はケルンです。公演会場は、ケルン大聖堂の近くに位置するドイツ有数のコンサートホール、ケルン・フィルハーモニー。N響の奏でのびやかな響きに、聴衆は真剣に耳を傾け、演奏終了後にはブラボーの声がありました。



上:シューマンのあと、ガベッタはソリスト・アンコールでヴァスクス《ドルテッシモ》を披露

中:演奏終了後のカーテンコールでは、客席からの温かい拍手が長く続いた

下:ステージを囲むように広がるケルン・フィルハーモニーの客席

Dortmund

ドルトムント(ドイツ)

2/29(日) 8:00pm

コンツェルトハウス・ドルトムント [Aプロ]

ドイツ西部で最も古い街のひとつであるドルトムント。N響がこの地を訪れるのは初めてですが、チケットは完売で関心の高さがうかがえました。満場の客席からは、盛大な拍手と大歓声がおくられ、ドルトムントでのデビューを大成功のうちに終えることができました。



上：花束を手に、聴衆からの大歓声を受けるパーヴォ。この公演でも客席からはスタンディングオベーションがおくられ、熱狂と興奮のなかで公演を終えた | ©Petra Coddington

中：ブルックナー《交響曲第7番》 | ©Petra Coddington

下：前半の演奏終了後に控室に戻るメンバー

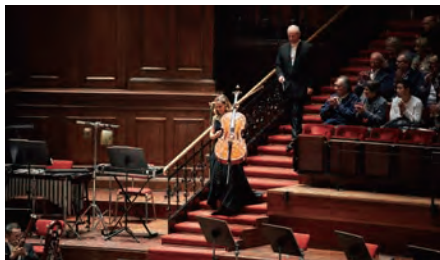
Amsterdam

アムステルダム(オランダ)

3/2(日) 8:15pm

コンサートヘボウ [Bプロ]

世界屈指の名門ホール、コンサートヘボウは、ホールの響きの美しさでも知られます。ヨーロッパ公演も終盤を迎え、ツアー最後の共演となったガベッタと届けた熱演に、演奏終了後の客席からは拍手や歓声沸き起こるなど、会場は大きく盛り上がりました。



上：ラフマニノフ《交響曲第2番》 | ©Eduardus Lee

中：ホール正面の階段を降りて登場するガベッタとパーヴォ
©Eduardus Lee

下：ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団の本拠地として知られる、コンサートヘボウの外観

Berlin

ベルリン(ドイツ)

3/3(日) 8:00pm

ベルリン・フィルハーモニー[Cプロ]

ツアーも大詰めを迎え、再びドイツに戻り、クラシック音楽の聖地ともいえるホールでのベルリン公演となりました。プニャティシヴィリとの抑揚のきいた演奏をはじめ、N響の魅力あふれる演奏に、ステージを囲む客席全体からは惜しみない拍手が長く続きました。



上：演奏後に花束を贈られるプニャティシヴィリ

中：リハーサルの様子

下：クラシック音楽の聖地とも言えるベルリン・フィルハーモニー。世界最高峰のオーケストラのひとつ、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地としても知られる

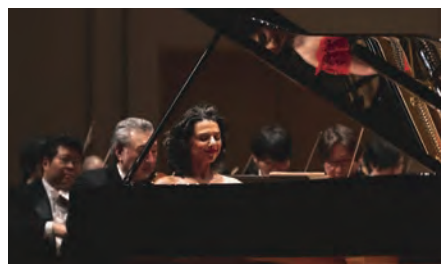
Brussels

ブリュッセル(ベルギー)

3/4(日) 8:00pm

パレ・デ・ボザール[Dプロ]

ツアーの最終公演は、エリーザベト王妃国際音楽コンクールの会場としても知られるパレ・デ・ボザールで行われました。N響が奏でる豊かな響きに、会場全体が音楽を楽しむ雰囲気に入れられ、ツアーの締めくりにふさわしい公演となりました。



上：パリ、ウィーン、ベルリンに引き続き、ベートーヴェン《ピアノ協奏曲第3番》のソリストを務めたプニャティシヴィリ | ©Lorraine Wauters

中：ラフマニノフ《交響曲第2番》 | ©Lorraine Wauters

下：演奏終了後、約2週間のツアーの成功を分かち合うように、力強く握手を交わすパヴァーと篠崎 | ©Lorraine Wauters

演奏会評

今回のヨーロッパ公演は、ヨーロッパ各地のメディアを通じてツアー前から大きく紹介され、コンサート後には多くの演奏会評が掲載されました。ここでは演奏会評の一部をご紹介します(抄訳)。

タリン公演

Postimees

2020年2月25日

Kai Taal

コンサート冒頭に演奏された武満徹の《ハウスロー・ザ・ウインド》は、エストニアの聴衆にかすかに日本の風景を運んできた。幻想的な音の世界の体験によって、おそらくもっとも有名な日本の作曲家である彼の音楽をさらに聴いてみたいと聴衆に感じさせたことだろう。続いて演奏されたシューマン《チェロ協奏曲》におけるソル・ガベッタの解釈は爽快で感動的だった。オーケストラが実に敏感で優れた音楽家たちの集まりであったことによって、彼女との競演が成功したことは大きな称賛に値する。20世紀初頭に建設されたエストニア・コンサート・ホールは、最新の音響特性を備えてはいないが、それにもかかわらず、ヤルヴィはソリストとオーケストラのバランス

をうまく調節し、ガベッタの演奏が一瞬ともオーケストラに埋没することなく、多くの柔軟性と遊び心、感性と深み、誇りと力強い表現を感じさせる驚くべき体験をもたらした。そしてコンサートはブルックナー《交響曲第7番》の素晴らしい演奏で幕を閉じたが、筆者はこれほどまでに心を揺さぶられたブルックナーの音楽を聞いたことがない。第1楽章の穏やかなテンポから、明確で説得力のある構築で魅惑的な音響世界を作り上げ、交響曲全体を通して作品の姿を見通すこと自体が大きな喜びであった。パフォーマンス全体を通じて、今回の演奏を聴く前には気付かなかった、悲しみ、時には強い悲劇の印象が残る。最も美しい交響曲のひとつであるこの作品への新鮮で魅惑的な音楽解釈は、間違いなく人々に長い間記憶されていくことだろう。そしてアンコール曲として演奏されたエストニア人作曲家ヘイノ・エツレルによる《故郷のメロディ》の深遠な表現は非常に感動的であった。

ロンドン公演

The Times

2020年2月25日

Anna Picard

ラフマニノフの《交響曲第2番》は最初のコントラバスとチェロの、金とアスファルトを織り合わせたような最初の音から、本当に素晴らしい演奏だった。ヤルヴィのリズムの柔軟さ、トロンボーン、テューバ、バス・クラリネットの輝き、オーボエとヴァイオリンのしなやかさと冷静さ、各々の奏者の力強さと知性が合わさって、快楽的だが優美な解釈を生み出していた。

シューマンで欠けていた身震いするような戦慄と武満に欠けていた静謐さが、すべてここにあっ

た。ホルンの地を這うような不穏さと死神のしかめっ面、イングリッシュ・ホルンの鷲鼻の歌、スケルツォ楽章の弾性とゆっくりとした微笑み、繊細なスネアドラムは、オーケストラのそれぞれのセクションがしっかりと自信と責任感をもって演奏していることを証明するものであった。

このラフマニノフは、準備が行き届いた演奏の模範例で、驚くべきデュナーミクの幅広さは、強制されているとも利己的であるとも感じられなかった。ヤルヴィは音楽の抑揚を扇動するのではなく、あくまでそれを自然に起こしていた。アダージョの息の長い旋律は有機的で、最終楽章のトランペットから流れ出る銀色の走句は嘘のように安らかに、愛らしく響いた。

パリ公演

Res Musica

2020年2月29日

Patrick Jézéquel

プログラムの最初の武満徹《ハウ・スロー・ザ・ウインド》は、ヨーロッパと日本間のクルージングへと聴衆を誘いだす。洗練された、穏やかな音楽は、統率のとれたこの日本の交響楽団によって完璧にコントロールされている。彼らは限られた音のパレットの中で、存在を示したり、あるいは透明な存在になったりすることを心得ており、時に基底部に東洋のハーモニーが響いているのが聴き取れる。

続くベートーヴェン《ピアノ協奏曲第3番》では、時代と美学、そして雰囲気ガラリと変化する。ドイツ式のロータリー・トランペット、コントラバスを持つこの交響楽団は、本当に日本の楽団なのか。なにせよ、耳を驚かせてくれるのは、指揮者のタクトの下で生み出される交響楽団の

丸みと柔軟性だ。楽譜を完璧に知り尽くしたカティア・ブニアティンヴィリリの演奏には、表層的な読みも少しの欠点も隠されておらず、とりわけ、ほとんど聴き取れないようなフレーズのしまい方は秀逸である。ここでもまた、ヤルヴィの思考が作品に神経を行き届かせており、それは特にピアノとオーケストラの総奏との間の完璧なバランスに見出される。

ブルックナーの《交響曲第7番》でもまた、目を閉じるだけで、ドイツ風のオーケストラに身を浸すことができる。この交響楽団は、雨に降られたかと思えば、陽の光に照らされたり、霧の中に見えなくなったりする登山者さながら、ある音楽の風土から別の音楽の風土へと、いとも巧みに雰囲気を変え、示し合わせた調和の素晴らしさで完璧にマエストロに答えている。

非常にセンスの良い、美しいひとときである。

ウィーン公演

Wiener Zeitung

2020年2月28日

Jens F. Laurson

伝統を誇る日本のオーケストラにとって、この日の公演は最も絶好調とはいえなかったようだ（管楽器にプレが全くなかった訳ではない）。しかし、まるで蝶が羽ばたくかのような金管楽器群の広がりと共に、精気を奮い起こす限界のない驚異的なフルサウンドは、とりわけ第2楽章のコーダでブルックナーを強く印象付けた。首席指揮者のパーヴォ・ヤルヴィが、このオーケストラとその伝統にいかにも深く関わっているかは、例えばhr交響楽団を指揮した演奏と同じブルックナーを遙かにスリムに感じることから明らかだ。

休憩の前は、カティア・ブニアティンヴィリリによ

きら ほうふつ
る煌めきの輪舞を彷彿させるベートーヴェンの演奏だった。大きな身振りによる《ピアノ協奏曲第3番》は極めてダイナミックでコントラストに満ちた攻撃的なものであった。これはアンコール曲のシューベルトの《即興曲 変ト長調》と明確な対照を意図したものだったが、均整のとれたメゾ・ピアノは見事にコントロールされていた。コンサートの最初に演奏された武満徹《ハウ・スロー・ザ・ウインド》は繊細な音楽であり、現代的で捉えやすい響きで表現され、微細な色調、細麗、そして表現豊かな残響と休止を伴う。より追求したいという気持ちにさせる演奏であった。

ケルン公演

Kölnische Rundschau

2020年3月2日

Matthias Corvin

70分に及ぶブルックナーが終わった瞬間、NHK交響楽団は拍手の嵐に包まれていた。日本から来訪した演奏家達が、ブルックナーの《交響曲第7番》を奏でる精確さを見事である。ホルンとこの作品で加わったワーグナー・チューバの音色は素晴らしく、そして柔らかかった。弦楽器はあらゆる箇所ですばやかな輝きを放つ。力強く押し寄せる音色を、ヤルヴィは巧妙に演出し、絶えず音量を調整した。神秘的なものが時として欠けていたとは言え、とにかく全てが上手く調和していた。

冒頭では日本の作曲家である武満徹の短いオーケストラ曲《ハウ・スロー・ザ・ウインド》が演奏された。静寂で旋回するような音楽作品に、高音のフルートの音色とデリケートな打楽器がアクセントをつける。ちなみに、この瞑想的な導入は休憩後のブルックナーの交響曲に最適だった。

プログラムの中盤のシューマンの《チェロ協奏曲》では、ソル・ガベッタが柔らかな旋律に乗せて、第2楽章では歌曲のような感傷的とも言える音色をゴフリラーのチェロから導き出していた。

ドルトムント公演

Westdeutsche Allgemeine

2020年3月11日

Anke Demirsoy

この夜のメイン・プログラムであるブルックナーの《交響曲第7番》では、神秘的な自然音が見事なほどの滑らかさで送り、激情をこめて高まっていき、頂点に到達する。ここではモチーフの繋がりが明確に表現される。

言うまでもなく金管奏者はフィナーレで再び存在感を示す。このクラスのオーケストラになるとコンディションは問題ではない。危うい綱渡りはしない。ヴァイオリンの響きは時折脆さを感じさせ弦楽器はフォルティッシモで音階を急降下する箇所では時に不気味な様相を呈するが、充滿した美しい旋律がこれらを覆い隠す。

武満徹のオーケストラ曲《ハウ・スロー・ザ・ウインド》の印象主義的で穏やかな序曲ではクロード・ドビュッシーの親縁性を否定することはできない。これに続くローベルト・シューマンの《チェロ協奏曲》ではアルゼンチン出身のソル・ガベッタがロマンチックなトーンの中に浸ることなく響きの繊細さを届けた。卓越した技量を要するパッセージでは激しさをもって巧みに熟す。アンコールで演奏したペテリス・ヴァスクスの《チェロのための本》では、美しい響きに乗せて聴衆の心に届く歌声を聴かせた。